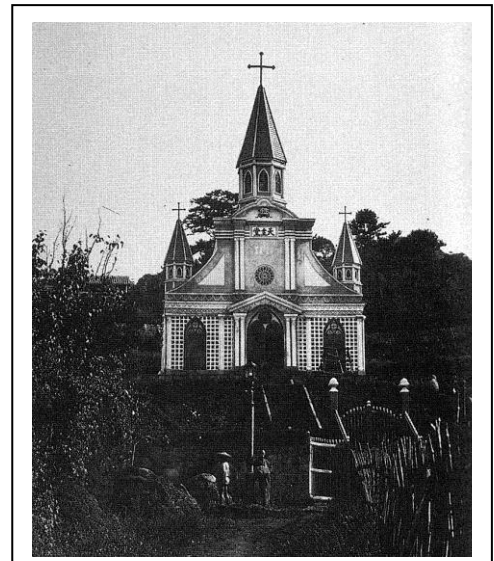


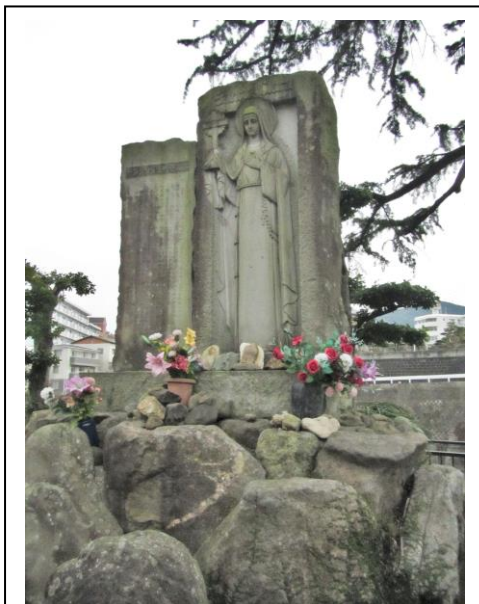
続・南蛮の風紀行 長崎編一2

カクレキリシタン

先にわたしは「明治の禁教令廃止からの隠れキリシタンの時代」と書きました。そうなんです。実は現在でも長崎県の五島列島などを中心にして、隠れキリシタン（学術用語的にはカクレキリシタン）は存在しています。「カクレキリシタン」とは、キリシタン時代にキリスト教に改宗した人々の子孫であり、1873年（明治6年）に禁教令が解かれて信仰の自由が認められた後もカトリックとは一線を画して潜伏時代より伝承されてきた信仰形態を、独自の組織下において維持し続けている人々を指します。オラショや儀礼などは多分にキリシタンの要素を留めていますが、長年月にわたる指導者不在のもと、日本の民俗信仰と深く結びつき、重層信仰、祖先崇拜、現世利益、儀礼主義的傾向を強く示すものになっています。（宮崎賢太郎著『カクレキリシタン』 - 21頁より）



創建当時の大浦天主堂。ここが明治維新直前の「信徒発見」の舞台でした。



浦上の爆心地付近にある17世紀にポルトガル人が建てた礼拝堂「サンタ・クララ堂」跡は、江戸期を通じて潜伏キリシタンの拠点となっていました。、明治維新前後の弾圧事件「浦上四番崩れ」の舞台にもなりました

豊臣時代、江戸時代初年などに相次いで出された禁教令と弾圧によって、殉教した人々以外に、棄教したと見せかけて実は集落ごとに深く潜伏して信仰を守った人々がいました。その人々のことを明治期以降「潜伏キリシタン」と呼んでいました。しかし、何せ正式の司祭などの指導もなく、証拠を残さないために聖書の内容など全て口述によって伝承されていったため、二百数十年後に、再び日の当たるところに出てきたときには、本来のキリスト教とは本質的などころで違いが生まれてしまったのです。キリスト教の祈りの言葉はポルトガル語では「オラソン」と言いますが、長崎の潜伏キリシタンたちの間に伝承されてきたものはそれが訛って「オラショー」と呼ばれています。わたしもその「オラショー」のCDを持っていますが、口述で伝えられて行



オラショーの収録されているCD。



ここも浦上四番崩れの舞台の一つとなった聖フランシスコ・ザベリオ堂跡。浦上天主堂の近くに位置しています。ザベリオとはザビエルの訛です。

くうちに自然に仏教の御詠歌のような節がついてしまったようです。

ところで、もう一度「明治6年」という年に注目してください。キリスト教が日本で解禁されたのは明治6年、逆に言うとそれまでは厳しい禁教令が敷かれていたということです。開明派で有名だった木戸孝允（桂小五郎）でさえ、明治政府になってからもキリシタン弾圧に一役買っているくらいなのです。

1854年に井伊直弼大老の元、日米和親条約が結ばれて江戸時代の鎖国政策が終了しました。1859年（安政6年）横浜・函館と共に長崎が外国に開港し、その前年に結ばれていた日仏修好通商条約に基づいてフランス人も居留するようになりました。

1862年にフランスから司祭が派遣されるようになり、1863年に着任したフランス人司祭ベルナル・プティジャン神父が大浦天主堂を建てるよう奔走しました。2年の月日をかけて現在の大浦天主堂の原型が完成しています。その大浦天主堂の庭の手入れをしていた神父に、ひとりの日本人女性が話しかけます。「我らの胸、あなたと同じ。サンタ・マリアの御像はどこ？」この杉本ゆりという女性の一言が、ベルナル神父の報告によってヨーロッパ社会に奇跡の「信徒発見」として大反響を引き起こしました。1587年の豊臣秀吉による伴天連追放令以来278年間、1614年の徳川幕府による禁教令発布以来259年間、潜伏キリシタンの中にいた正式に叙階を受けた最後の司祭が亡くなった1644年からでも221年間、見つければ首が飛ぶような弾圧を受けながら、秘密裏に信仰を守り通したキリシタンが再発見されたのです。

しかし、それからも潜伏キリシタンたちの苦悩は続きます。「信徒発見」の4年後の1867年（慶応3年）のちに浦上四番崩れと呼ばれることになる事件が起き、最初に捕縛された人々が凄惨な拷問を受けたことはもちろんですが、外国人居留者たちの再三の抗議にも関わらず、捕縛や拷問、処罰は幕府が瓦解して明治政府が発足した後も続きました。明治元年（慶応4年）政府の参議であり、外国事務係となっていた木戸孝允が長崎を訪れて、事件の顛末を決定した時も、信者たちを流罪にすることを決定しています。

徳川幕府が結んだ所謂不平等条約を解消する交渉に臨んだ時に、交換条件のひとつであったキリスト教解禁に応えるために、明治6年になってようやく政府はキリスト教禁教令を廃止しました。生存していた潜伏キリシタンたちは陽の目を見る事ができるようになったのです。しかし、あまりにも長い間、司祭もいない書物もない状態での信仰が続いたため、その時から信者たちはカクレキリシタンとして、キリスト教徒は少し違和感のある信仰を守っていくことになり、今でもそれが続くことになったのです。



明治期に入ってから信徒の拷問に使われていたという「拷問石」。信者はこの上に正座させられていたんです。